

# 「山古志 復興新ビジョン研究会」

## 第3回全体会議 議事概要

1.日 時 平成17年5月9日(月) 10:30~12:20

2.場 所 ニューオータニ長岡 2F「柏の間」

### 3.議事概要

(1) 出席者照会と配布資料の確認(省略)

(2) 委員長挨拶(省略)

・新潟経済同友会 江村 隆三

(3) ゲストスピーカー挨拶(省略)

・長岡市復興管理監 長島 忠美 氏

(4) 第2回全体会議、第3回円卓会議の確認

第2回全体会議、第3回円卓会議における主な意見(事務局より資料 3説明)

(5) 復興新ビジョン最終報告の検討・決定

最終報告<本編、資料編>の説明(事務局より資料 4,5説明)

意見交換 <各委員から一言ずつ>

(長島ゲストスピーカー)

このビジョンを住民がどう受け止め、どこにどう参加していけるかがカギになると考えている。

(平井座長)

長岡市にある長岡造形大学、長岡技術科学大学、長岡大学、長岡雪氷防災研究所、長岡工業高等専門学校との5機関で大学院大学を目指した防災・安全のコンソーシアムや市民安全アカデミー等も含めて一体的に活動を進めてこうという構想を考えた。復興新ビジョンにある、「株式会社 山古志村(仮称)」や「NPO法人山古志防災フロンティア(仮称)」と一緒に活動展開

ができると考えている。

(伊藤委員)

- ・今後、復興新ビジョンのエンジンの部分にどうやって火をつけていくかが課題である。集落によって、例えば営農面について何回も話し合いがあった集落と全く手つかずの集落があるなど、集落間の差が大きいと聞いている。復興新ビジョンに示してある「株式会社 山古志村」が起爆剤となって、集落、地域間をつなげていくことが大切である。
- ・現地では法制度との関わりが課題となっている。つまり復興のタイムスケジュールが、行政の事業年度等に縛られる面がある。本ビジョンでは制度の柔軟性のある対応を求めている。それをモデル化して行くことが、今後、我が国の中山間地づくり・国土づくりに貴重な教訓になるのではと考えている。

(深澤委員)

復興新ビジョンそのものは良くできているが、住民不在なこと、住民自身の声が聞こえていないことに懸念を感じる。山古志が抱える豪雪・過疎・少子高齢化にもう少し踏み込む必要があったのではないか。特に、住宅再建に対して、公的な住宅補助がほとんど無く、自力で住宅再建が困難な方の再建方策など、住民の切実な問題、当面の問題に対して、どれだけ踏み込めたか不安である。

(丸山(結)委員)

- ・山古志住民との意識、スピードの違いに少しジレンマを感じている。「株式会社 山古志村」で言えば、外に向けて情報発信していきたいが、ビジネスとして非常に魅力があり、外部の人が飛びつき、一歩間違えると食べ物にされないかという危惧を感じる。一般住民に何か旨味があるのかというと、結局、外部の人々に使われて、お金をもらって、それで終わりという形になるのではないかということである。一般住民の自立心をどう引き出していくか、非常に難しい。また、外の時間の動きと、山古志の住民の気持ちの時間の動きにギャップがあり、今、住民は住宅や生活が心配で、外部の私たちとはスピードが違う。このことを理解することが必要である。
- ・一方で、ビジョンをみて、書いてあることを「やってみようかな」というような芽も出てきている。その芽を、丁寧に引き出していく時間と忍耐もこれからは必要だと考える。「株式会社 山古志村設立準備会(仮称)」も、早く立ち上げるだけでなく、住民の人たちの芽をゆっくり確実に引き出す機能が必要だと思う。さらには、今後の取り組みについて、忘れ去られず、興味を持って見て頂けるような発信機能も必要だと思う。

(上村委員)

今回の取り組みが、第3者のお節介で終わらないようにしていきたい。復興

新ビジョンで大事なことは、定住でなくても、交流人口や新しい住民も増えるような山古志の魅力を磨きあげ創出することだと考える。山古志そのものが商品である。そして住民の皆さんがその気になって、ビジョンに参画することを願っている。

(澤田委員)

復興新ビジョンを示すことで、住民と復興について話し合うきっかけになると思う。外部からみて、このような取り組みを実行すればこういったことができるというマニフェスト的に機能するのではないかと思う。地域の再生に関わるきっかけ・拠り所になるのではと考える。

(高野委員)

- ・この復興新ビジョンを創業者としてみると、現実がついてきていないように思う。つまり経済的な裏づけが具体的に見えない。もちろん、今は見えなくていいのだが、どうつなげていくか、道筋が見えればよいと思う。
- ・「株式会社 山古志村」の社長は誰でもいいというようなご意見もあったが、トップの人は意志を明確に打ち出せる人が必要である。
- ・今回の復興新ビジョンは、長期ビジョンである。今後、力強く行政にも打ち出して欲しいし、マスコミにももっとPRして欲しいと考える。

(熊谷委員)

- ・今後、山古志の住民がビジョンを読み砕くステップが絶対に必要であり、そういった住民へのフォローアップが必要である。また住民自身の目線で、ビジョンに示されている取り組みを実行したときに、かなりいろんな問題にぶつかると思う。マニフェストといったご意見もあったが、約束ではなく、最終的には住民がとことん話し合っ変わっていてもよい。むしろ住民をつなぐ輪の役目としてビジョンが機能し、現実性のあるビジョンになっていくようになるべきだと考えている。
- ・またこの活動をドキュメントして記録をとっていく。この記録は、他の中山間地域、日本に限らない台湾などの海外、過疎地の振興など、様々なモデルに役立つ可能性があると考えている。

(原委員)

阪神・淡路大震災の被災地を見てきたことがある。この地域ではすごいハード整備が行われていたが、結局、感じたことは、現地を説明してくれた人がものすごく素晴らしかったことである。山古志の場合も、どういう人材を得られるかがポイントになると考える。我々は、防災コンソーシアムを創るのだから、防災に関する提案、一年一年の復興プロセスが確実に加わっていくことが大事であると考えている。

(西澤座長)

- ・何とか「株式会社 山古志村」を軌道に乗せたい。年内に株主を集めたり、勉強会を早期に立ち上げたりするなど、早急に活動に入りたい。時機を逸してしまうことを危惧している。
- ・「積雪科学館(仮称)」の整備は是非とも実現してほしい。

(金子委員)

企業の活動には二つの側面がある。競争と成長である。「株式会社 山古志村」の場合、競争は復旧活動、成長は復興活動であると考え。この二つに同時に取り組んでいかなければ、会社が成長していくのは難しいと考える。また、復旧面はベテランの智恵や経験を重視してまかせる。復興は若手の発想と実行力にまかせる。このように割り切って進めていくことが、成功の一つのポイントであると感じる。

(樋口委員)

- ・ビジョンをビジュアル化して、もう少しわかりやすく書いたものを住民に提案する必要がある。
- ・「道の駅」で山古志ブランドを扱うのであれば、「結いのむらづくり」構想としているのだから「村の駅」にして、施策は施策として利用しながらも名称は替えていった方がよいと考える。
- ・「株式会社 山古志村」について、協働や出資を仰ぐ時期を逸しないことが大事である。また、同時に人材確保していけば、実現の可能性は高いと考える。
- ・住民の心の変化を読み取っていくことがこれからの継続的な課題でありテーマであると考えている。それを読み取れることができれば、このビジョンがよい方向に向かっているということになる。

(大川委員)

地盤が安定するまで時間がかかる。同じように人の心の動きという事象もゆっくりとした時間の中で捉えていく必要があると思う。「取り組みはファーストに。事象の捉え方はスローに」と考える。そういう気持ちが必要であり、性急な成果を期待してはいけないと考える。

(丸井委員)

海外への発信、海外からの応援という観点で、2つの取り組みが始まっている。1つは、来年2006年9月の最終週に国際防災学会を開催する計画がある。山古志の土砂災害等をメインテーマとして学会を行い、山古志での現地見学会も計画している。もう1つは、ウィーン工科大学の建築の教授が、地震発生時に日本におられて現地をつぶさにご覧になり、自分たちができることはないかと考え、今年は日本とEUとの交流年にあたることから、「新潟プロジェクト」を立ち上げられている。耐震建築・避難所として役立つ建

策等を協議し、具体的な提案を行い、その成果を6月にウィーンで、秋に東京・新潟で展示することを計画している。

(松本委員)

防災フロンティアに関連して、山古志周辺の人々に安全・安心の面で役立つように動的運用型ハザードマップを開発・研究していくことを考えている。

(和田座長)

新潟県では、地震もさることながら、水害もあり、豪雪もあった。この地域が、言わば脆弱国土のモデル地域であることを呈したのではないかと考える。我々も、そういった脆弱なところに住んでいることを認識したうえで、社会資本整備の必要性を考えていくきっかけになったと考えている。

(伊藤総合アドバイザー)

- ・このビジョンをわずか4ヶ月でよくできたと感心している。問題点はフィージビリティにある。どのように運用し、事業を運営していくか、これが非常に重要であると考え。これがうまくいけば、中山間地において災害が起きたときの復興モデルになる。今回の災害は、まさに山地災害のモデルであった。振り返ってみても、ハードは土砂対策、ソフト面は山村の孤立対策を今後どう進めていくかの視点を提供できたと考え。
- ・今、緊急に実施しなければならないことはハザードマップの作成である。前回のハザードマップは既存のデータを元に作成した机上のものである。雪融け後に現地調査を行い、住民の方々が帰っても安全・安心して住んでいたような、出発点になるハザードマップを整備しておかなければならないと考える。
- ・山古志出身の方々に結束して頂くために、たとえば「東京山古志会」や「新潟山古志会」なるものを創ってみてはどうか。山古志と東京や新潟を行き来する。そういうものを創ることによって、ふるさとを軸にした結束ができる。

(木村アドバイザー)

「ビジョンと現実論とがなかなかつながらない」という意見があった。ビジョンと現実をどうつなげるのが重要であり、住民の方が考える目の前の問題をクリアにする記述がもう少しあればよかったと感じる。たとえば、今年の冬も仮設住宅に暮らさなければならぬ可能性がある。この半年間の間に被害の少ない家を使えるようにしないと、また被害が拡大してしまい、ビジョンと離れた状況になってしまう。どうしても被災地というのは、公共事業が優先になり、個人の住宅の復旧というのは後回しになってしまう。住民はその辺のことが心配であり、不安を解消してあげることが大事である。具体的には修繕部隊のようなものを創って、計画的にこの半年間で修繕していくなど、目の前の問題を住民の人が結束して解消していくとよいのではと考え

る。

(小田オブザーバ)

長島ゲストスピーカーの言葉が耳に残っている。「このビジョンに、住民がどこにどう参加していけるかがキーワードである」ということである。ビジョンを実行していく主人公は住民であることは当然だが、住民に荷が重いことばかり盛り込まれているのではないかという感じもする。

問題は、「何で復興させる必要があるのか、復興させることにどんな重要な意味が込められているのか」が原点である。地震列島に住んでいる以上、災害は避けられない。しかし、被災しても決して捨てないんだ、復興させるんだ、復興させる意味があるんだ、-それは、村を放っておくと街中も荒れてしまう。日本国土の7割を占める中山間地を放っておくということは近接の街中も荒れることになる。つまり街中に住んでいる私たちの問題でもある - というメッセージが弱かったのではと感じる。今後、メッセージを積極的に発信し、その穴を埋めていく必要がある。

(6) 今後の活動について

今後のスケジュール(資料6)の説明も含め、事務局より、以下の事項について研究会にお願いし、了承される。

- ・「株式会社 山古志村設立準備会(仮称)」と「NPO 法人 防災フロンティア(仮称)」を支援していくため、山古志復興新ビジョン研究会を1年程度延長する。
- ・2つのワーキンググループに分けて取り組む。

閉会

(文責：事務局山口)